

漆喰と石灰

豊の国生活文化研究所所長・写真家
藤田洋三

幕末から明治の左官職人や壁の素材「漆喰」で構成された、近代化遺産と呼ばれる建物に擬洋風（ぎようふう）建築や土蔵や民家があるが、こうした建物の基礎に赤土に石灰と砂を混ぜてたたき締める、三和土や二和土やベトンという、セメント以前のセメントの役目を果たした石灰がある。これらを構成した石灰や泥土の世界に目を向けると石灰から作られる漆喰（しっくい・石灰を焼いて海藻糊を混ぜ合わせた壁材で城郭・社寺・土蔵に使われた）は、文明開化の頃に岡蒸気が登場して廃業に追い込まれた鉄道馬車のように、西洋建築とともに登場した外国生まれのセメントによって姿を消し始める。

石灰の歴史を見渡すとセメントがない時代に「どのようにして都市を形成したのか」という素朴な疑問も湧いてくる。本来ならここで資料を開いたり、インターネットで検索すれば事足りるのだが、本やネットからでは得ることのできない、その時代に生きた人々の思いのようなモノが知りたいと石灰（いしばい）以前の貝灰や牡蠣灰（かき）・珊瑚灰・蚌灰（淡水貝のボウ灰）を焼成した、石灰の窯跡やセメント以前の泥土を固めた石灰の遺構を歩き始める。そこで石灰に関するどんなに些細なことも漏らさないように情報収集を始めたら、昭和6年2月に岩手県の「小岩井農場」用の炭酸カルシウム工場として発足した「東北砕石工場・鈴木東蔵」の技師となり、石灰の宣伝販売を受け持つ営業マンとなった「宮沢賢治」が登場した。賢治は、同年8月頃に「風の又三郎」の執筆を進め、9月に教え子の沢里武治に「風の又三郎」<どっどどどど>の作曲を依頼。9月20日、石灰の宣伝で上京中に東京神田駿河台の「八番館」という商人宿で発病して遺書を書き28日に帰郷、自宅で病臥。11月3日、手帳に名作「雨ニモ負ケズ」を記し、昭和8年に生まれ故郷の花巻で37歳の生涯を終えていた。

賢治は、琵琶湖疎水の橋梁とそこを走る列車をモデルにした「銀河鉄道の夜」や、「風の又三郎」という作品で知られるが、その世界に横たわる足元に目をやれば、顕微鏡の鉱石の拡大像が文字となり、空を仰げば天体望遠鏡の星の世界が文学となって広がっている。賢治の遺品の皮靴の中に、数個の石灰石と一冊の手帳があって、その手帳から「雨ニモマケズ」の詩が登場したのを知ったのは数年前のこと。偶然とはいえ石灰営業マンの宮沢賢治を知った直後、黒磨き壁の撮影で岩手県（イーハトーブ）に出かけることになった。このとき神社の屋根を見上げたら、賢治が笑いながら手招きしてきた。これが現場なんだと賢治との対話を楽しんで、「雨ニモ負ケズ 風ニモ負ケズ 雪ニモ 夏ノ暑サニモ負ケズ」という名作は、賢治の人生と屋根漆喰を重ねた視点から生まれた作品ではあるまいか。石灰の営業マンだった賢治の思いが、これを書かせたのではないかと思ひ至り、屋根漆喰と自分を重ねて切なく歌い上げた宮沢賢治を身近に感じるのだった。

「ナマコ壁の胎動は安土桃山時代から？」

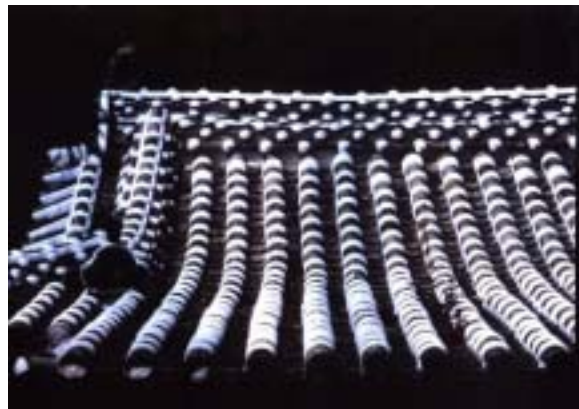
宮沢賢治の名作と思える屋根漆喰や江戸時代に突然発生したといわれるナマコ壁についても撮影を続けている。「文化の発生は、そこから50年以前を見ないと真実は分からない」ともいわれているので桃山時代に目を向けてみた。すると鉄砲が伝来して築城に革命的な変化が生じ、強力な武器に対抗する必要から城郭は石組・塗り壁・瓦葺きとなり、外壁は防火や防弾を目的とした厚い土壁で施工されるようになっていた。こうした天守閣の威容を強調する白亜の漆喰仕上げが、左官職人に現場を提供することになり、これを賄うため左官工事の需要は、前時代とは比較にならないくらい増大したことが浮上した。

「江戸時代」

元和元年（1615）、大坂夏の陣で徳川家康が圧倒的な勝利を得ると、武家法度が布告され、元和一国一城令で諸大名の城郭新築や修復は厳しく管理され、幕府の許可が必要となる。家康は国許三河から連れてきた職人を使って、江戸城を始め神社仏閣や武家、商人、町人の町割りや上水道の建設を始めた。

前号にも記したが宝暦6年（1756）、鎖国の島国で日本人が泥や藁を使って壁や水路を作っていた頃、英国人のジョン・スミートンがセメントの基礎やレンガ職人ジョセフ・アプスディンが石灰石と粘土を溶融点まで焼いた水硬性（水で固まる性質）のポルトランドセメントを完成させる。一方日本では、享保3年（1718）に大岡越前に命じ、隣接家屋を取り壊す破壊消防の組織を登場させた。このため江戸町内の火の取り扱いは異常に厳しく、日没以降の煮炊きや炊飯は固く禁じられ、辻々に防火用水を常設し、触書を発令して違反者を斬首や厳罰や科料にするなど様々な方法で防火に努めた。しかしいくら厳しい触書を発令しても江戸という都市の性格上火災は防げるものではなく、人々は自分達の財産を守るため穴倉を掘り、火災が発生したら消火よりも逃げるのが最大の対策で、江戸の半分が穴倉になったといわれた。

享保6年（1720）、徳川将軍吉宗が度重なる大火災のため、やむなく徳川禁止考を変更して、「町中普請之土蔵作塗屋瓦屋根勝手次第ノ事」という触書を発令し、庶民に土蔵造りを許可した。土蔵造りの建物は、貴重な財産を守るばかりでなく火事と地震を生き抜いた江戸っ子に受け入れられ、気候や風土に調和して「防火」と「モノをしまう」日本独自の文化を生み出す。



南
蛮
漆
喰

南蛮漆喰 = 屋根漆喰 (雨二モ負ケズ風二モ負ケズ)

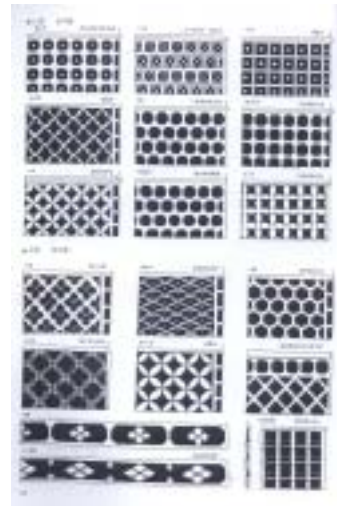
人類は、太古の昔から貝殻や石灰石を焼いて石灰を得てきたが、我国で貝灰が焼かれたのは、稲作が伝わった後の銅や鉄器の登場の頃と推察されている。仏教伝来以降、法隆寺の文献に度々石灰の記載が登場するが、当時の石灰は、高価で高貴な人しか使用できず、平安時代に作られた平安京禁裏の清涼殿の石灰壇(図1)等がその代表といわれている。石灰岩を焼いて得る石灰は、江戸城の普請で漆喰が大量に必要となり、関東青梅の成木で薪の上に石灰岩を置き、三日三晩かけて焼かれた記録がある。白壁が一般に普及するのは、徳川吉宗が度重なる大火災のため、やむなく徳川禁止考を解除した江戸中期享保6年(1720)以降からで、漆喰は松葉、薪、木炭・石炭・重油(産業用)と燃料を変えながら、今も連綿と焼成されている。こうして焼成された石灰は、水をかけたり、自然に消化させた消石灰と未消化な生石灰に分けられる。

白壁の材料となる漆喰を百科辞典で調べると「消石灰が主材料で、これにスサを加え糊液で練った物を指し、粘土を混ぜたものを“大津”と呼んだ。スサは、高級仕様では紙をほぐしてドロドロにしたもの。並仕様は麻(上塗りは麻を漂白したもの)を裁断したものを使う。糊液は海草(ツノマタ・ギンナン・フノリ)を炊き、これを濾して作る。海草糊や麻スサを用いるのは、日本独自の工法で外国では糊を使わず、時に膠を用いスサとして動物の毛を使う」と記されている。



この漆喰に南蛮の名前がついた南蛮漆喰は、中国やマカオを経て、ポルトガルやスペイン人によって伝えられたと思っていたら、どうやらそうではないらしい。各地で南蛮漆喰と呼ばれているモノは、泥と石灰を混ぜたものを指し、南蛮またはナンバと呼ぶ地方もあれば、砂と石灰だけのものを南蛮と呼ぶところもある。大分では、漆喰に油を入れたものが南蛮が、誰に聞いても何故南蛮なつきりしない。なにしろ職人子相伝の秘密の世界。「技は

ので、秘伝は口伝え」
、そうそう簡単に尻尾は掴ませてくれ
そこでITで検索するが何も登場しないので、角度を変えて
名を調べてみた。南蛮大名とよばれた豊後国主大友宗麟は、
ン国王フェリペ2世と交易を行い、1582年に我国で始めて
ンに少年使節を送りヨーロッパのハイテクを輸入。国内が
文化を移入して宗麟の居城があった臼杵市には、ゲーテン
の印刷機を始めパイプオルガンやグレゴリオ聖歌・ビオラガンバ等の楽器や美術や彫刻等キリスト
教を中心とした文化が上陸した歴史が残されている。しかし繁栄を極めた大友家は、天正14年12月
(1586)に義統(吉統)が島津軍に大敗し、翌15年に島津義久も豊臣に呑み込まれ領地は250の小
藩に分断された。やがて秀吉によってキリスト教の禁教令が発令され、それまで蓄積されていたヨ



漆喰だ
のかは
は、一
盗むも
ない。
南蛮大
スペイ
バチカ
ら京都
ベルグ

ヨーロッパ文化はキリスト教とともに姿を消しその後、徳川の時代を迎え3代将軍家光が鎖国令を発令、日本は牡蠣のように国を閉ざした。

家康が食べ過ぎて死んでしまったといわれるテンプラは、南蛮渡来のテンプラートやテンペがオリジナルと伝承されているが、南蛮貿易と縁の深かった九州では、屋根やナマコ壁の平瓦を止める竹釘を油で揚げてテンプラにするところがある。勿論、食べる為ではなく竹釘の耐用年数を伸ばすのだ。昔の人はモノを大切に扱い使い捨てなどしない。おそらく竹釘を揚げた油も決して捨てたりしないはず。そこでこの油を漆喰に入れたのが、南蛮漆喰の始まりではなかろうかと僅かな手掛かりをもとにその始まりを探ってみる事にした。始めに1549年にフランシスコ・ザビエルがキリスト教とともに中国からマカオ、鹿児島を経て、豊後に入国した時に南蛮漆喰を持ち込んだと仮定して関係資料を開いてみた。すると大分百科事典に、我が国で最初に建設された西洋建築は、「豊後臼杵のコレジオやセミナリオである」という記述とイラストが登場した。そこで建築史家にこのことを質問するが、イラストは復元想像図であり、その建物にどのような漆喰が使われていたか現物がないと判らないという。

しかしポルトガルやスペイン船が持ち込んだと仮定した南蛮漆喰は、通常の漆喰とは異なり、「油」が練り込まれた漆喰なのだ

と郷土出身で上智大学関係者の村上直次郎氏が翻訳したバチカンの資料をひも解いてみた。そのなかに大友義杵城を築いた2年後の永禄8年（1565）に、



ン・ルイス・アルメイダというイエズス会のが本国に送った「耶蘇會士日本通信上巻」と簡に、日本の白壁の美しさに心を動かされ、貴山城を訪れた様子をバチカンに伝えてい

鎮が白
イスマ
宣教師
いう書
大和信
た。
うに書

ここに漆喰の記事が登場するが、当然のよ

かれた城は日本のものなので油を使うとは書かれていない。油を使用する「南蛮漆喰」と普通の漆喰は違うのだと諦めきれず、友人で臼杵市在住の斉藤氏に電話を入れてみた。氏は長年建築調査や全国町並みゼミを熱心にやってこられた人で、南蛮方面にも造詣が深いのできっと何か知っている。そう思って連絡を入れるとスラスラと南蛮漆喰のルーツとも思える「大佛漆喰」や「油磁漆喰・ゆがき」の話をするのだ。こうして臼杵市の唐人町に居住した陳元明という渡来人が、天正3年（1573）



に豊後藩主の大友宗麟に拝謁した後に、石田三成や豊臣秀吉に謁見を許された物語が浮上した。

城郭建築は、大坂夏の陣で徳川幕府の覇権確立で下火となるが、天正12年（1584）大和興福寺の「多聞院日記」に「築地延引瓦葺之容易也油併石灰入一段堅久可在之所也」と石灰に油を混入して硬化させる技法が記されている。天正14年（1586）豊臣秀吉は国家大康の為に京都東山方広寺の大仏建設を始め、諸国大名に賦課普請を定めた。この頃に陳元明や王退が牡蠣灰に菜種油を混入する「油磁漆喰」や「大佛漆喰」

を伝えていて、臼杵市内にはいまでも油碓漆喰で作られた元明の墓や一子相伝の書が現存しているが、図書館に残された太閤検地帳に「大佛漆喰御免」徳鳳・平湖・九右衛門の名前が残され、この資料から税金を免除され屋敷を持つ事を許可されたところをみると同天正 14 年に泉州堺奉行の今井宗久是が全国から集めた数万俵もの牡蠣殻が、方広寺で使われる予定だったと考えても異論はないと思われる。

中国では左官を「水泥匠」と書きスイニーショウ（韓国はビーチャン）と呼び、漆喰は唐音の石灰（シクイ）が表記されたものと伝承されるが、このことから渡来人の陳元明達が生きた油碓漆喰や大佛漆喰（陳漆喰）が、江戸時代の塗り籠め建築や町屋の土木工事に多大な影響を与えたことが読み取れる。

「石灰モルタル」について

日本石灰協会が発行している「LIME・石灰」誌2004年1月号に興味深い記事が掲載されていた。これは石灰モルタルVSセメントと題したGlobal Cement And Lime Magazin（GCL）September2003の抜粋だが、興味深い記事なので紹介したい。

序文は、「石灰は1900年以前の建築物に多用されていた。今でも歴史的建造物の修復材に使われており、また最近はその利点を近代建築に活かしてみようという専門家が増えてきている。石灰は19世紀まで建築の主流工法であったが、ポルトランドセメントが登場後20世紀に入り減少。しかし最近20年で増加傾向にある。それは硬いセメントリッチのモルタルは古い建築物に適さないことが知られてきたからで、石灰は建築物保護の用途として復活した。というものでさらに次のように展開している。

石灰の利点 石灰は石材等の建造物の目地材、壁材として使われる。伝統的建造物は石、レンガ、木材、土などの比較的柔らかく多孔質の材料に石灰ベースのモルタルを塗布したものが主で、これらは緻密な壁で大した基礎もないものがあるが、接着剤としての石灰モルタルが石やレンガより柔らかく、多少の地面の沈下や気温の変化に順応している。

湿気の移動 柔らかな石灰モルタルは石材より多孔質なために水分の蒸発を助け、塩分等の析出を目地に集める効果がある。傷んだ目地を修復するのは石材を修復するよりはるかに容易で安価である。セメントの場合、収縮ヘアラックの発生により雨水が壁内部に侵入すると建物内部の水分が蒸発できなくなり結露による内壁損傷が起こる。しかし多孔質の石灰では水分呼吸の効果で室内をドライに保つことができる。また石灰を使ったほうが美しい。

石灰の種類 石灰は石灰岩をキルンで焼成して作られる。石灰岩の純度と焼成温度は製品品質に影響を与える。またシリカ、アルミナ等の不純物を含む石灰岩からは純粋な石灰より硬く早硬性がある水硬性石灰が作られる。共に水を加えて使用される。

環境の視点 英国では年間 30 億個のレンガ焼成に多量の燃料を消費し、CO₂ を放出している。石灰モルタルを使用すれば煉瓦の再利用が容易となりレンガ消費を抑えられる。また焼成温度がセメントより石灰の方が低い為、石灰を使用する方が総エネルギー削減効果が大きい。加えて石灰は施工過程で CO₂ を吸収する効果がある。

将来の展望 石灰は決して再び建築材料の主流にはならないと考えている人々も少しづつ考え方が変化してきている。炭素税導入やリサイクル法制定によりセメントが不利になり、自然に石灰が選ばれるようになるだろう。私は将来が環境に優しい「グリーン」に向かうものと信ずる。 石灰 = グリーン

終章について著者が翻訳者の意見が署名記事ではないので明確ではないが、興味をひかれる。何故なら石灰と人間の営みを考える時、こうした情報が 21 世紀のインターネット社会でどのように理解されるか考える事も必要で、これまでデイスクロージされなかったエンドユーザーの女性達が VOC やシックハウス、またはアトピー性皮膚炎から家族を守ろうとする意識がどう働くか、そしてこれまで住宅を製造してきた建築の世界やハウスメーカーがどのような評価を受けるか興味を惹かれる事となるからだ。何故なら 21 世紀の消費行動は、「本物と健康」しか対象にならないという答えが用意されているからに他ならない。

付録 「油礮漆喰とタタキ土・三和・たたき」

土を固めて作る土間や家屋の基礎部分を普通タタキという。「叩き」、「敲き」と書くが「三和土」と書いて「タタキ」とルビをふるところもあり、サンワやタタキは混称されている。土間用の土は叩き土、または敲き土といい、花崗岩・安山岩などの風化した可溶性珪酸に富む土が良いとされ、天川土・三州土・深草土が知られている。天川土は、長崎地方に産する安山岩風化土でこれに石灰を加え、水で練ると硬化する水硬性の土で天川漆喰（あまかわ）と呼ばれ土間に用いた。三和土は、これらの土に塩に含まれる苦汁・ニガリに石灰を塗して木片で叩いたもの（または搗く）。二和土は土と石灰だけで、石灰を加えて水で練ると硬化する性質を持ち、これを三寸程、土間の仕上げに叩きしめる。これが通常のタタキの概要だが、タタキは水を使う所と使用しない所もあり様々である。大分県の狭間地区では三和土をベトンと呼ぶが「ベトン」の語源は、フランス語のコンクリートを意味するが、その由来は不明である。タタキ土には京都の深草砂利、西日本の真土（まさ土）、三河周辺ではサバ土と呼ばれる、風化した砂利（死に石）の混ざった粘土質の土があり、高知ではハンダ、熊本では松葉の煮汁を加えるガンゼキ、愛媛・山口ではヨドヤと呼んでいる。

南蛮漆喰（屋根漆喰）や三和土は、江戸城の賦課普請で各藩お抱え左官が集められた時に「左官」という名称が定着したと推察されるように、豊臣秀吉の方広寺の賦課普請で全国から集められた職人が、南蛮渡りの秘伝「油礮漆喰」をそれぞれの故郷に持ち帰って広めたものではないかと推察された。南蛮渡来とは「海を越えてやって来たもの」という意味だが、これを西洋からと考えたから話がややこしくなったようだ。

西洋人は「紅毛人」と呼ばれたが、どうやらここら辺りが大陸から入れ替わって伝えられた「豆腐や納豆」のように南蛮漆喰や三和土の呼称の曖昧さの一因と思われる。明確なことは何一つ開明できないまま終章を迎えたが、南蛮漆喰について詳細な資料や情報をお持ちの読者諸兄が居られれば、ご教授頂きたいと願う次第です。

写真・文 藤田洋三

豊の国生活文化研究所所長・写真家